

令和2年度学校自己評価システムシート(県立けやき特別支援学校伊奈分校)

目指す学校像	安定した人間関係を形成し、「自らの病状や実態を理解し、自らの健康管理ができる力」と「基礎学力」を身につけさせ、子どもたちの夢や希望の実現に向けて全力で取り組む、保護者・病院から信頼される学校
--------	---

重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 病弱教育としての「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを行う。 2 自立活動の実践をベースに子ども一人一人をしっかりと見つめ、スムーズな復学を目指す。 3 子ども主体の各種活動をとおし、豊かな心・創造性を育む。 4 病弱教育のセンター的機能を拡充し、病弱教育への理解を広げる。
------	--

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日は、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	7名
	生徒	3名
	事務局(教職員)	12名

学校自己評価				年度評価(2月1日現在)		
年度目標				年度評価(2月1日現在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度
1	平成31年度は「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりの研究2年目として、授業のユニバーサルデザイン化やICT機器の活用についての研究をさらに進め、授業UDリストを作成し、実践事例をまとめることができた。令和2年度は研究のまとめの年である。すでに「できた」という喜びが得られる授業、子どもが参加したくなる魅力的な授業を目指し、研究の質を高める必要がある。	授業のユニバーサルデザイン化やICT機器の活用をさらに推進し、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を充実させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「病弱教育における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりに関する実践研究」のまとめの年として、これまでの研究を踏まえ、ICTの活用や授業のUD化を図りながら「楽しく魅力ある授業づくり」を4つの視点で整理する。4つの視点については、①全員参加の授業、②学習情報の取り入れ、③構造化とルーティン化、④表出と表現、の4グループに分かれ、研究を進める。(相談・研究部) ・各種ICT機器を有効活用できるような、機器の管理や活用方法の研修会を企画する。また、県の管理基準を順守し、児童生徒や教師が活用しやすい環境を整えていく。(教務・情報部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容について、4つの視点で「楽しく魅力ある授業づくり」を整理、実践し、伊奈分校全体で共有できた。(相談研究部) ・使いやすい環境の整備と安全な運用を行い、必要に応じて研修を行いながらICTの活用を強化できた。(教務・情報部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめの年として、「病弱教育における主体的・対話的で深い学び」について、4つの視点から授業づくりを検証し、まとめることができた。また、それらの成果について、学校全体で共有することができた。(相談研究部) ・今年度の新規導入機器を含め、研究部と関連付けながら、研修を進めることができた。(教務・情報部) 	A
2	昨年度は「自分メーター」のスタートキットを作成し取組を充実させた。また、「自分メーター」のアプリ化をすることができた。しかし、復学支援会議での活用は、まだ十分ではない。集団における自立活動については、それぞれの学部で週1回行い、集団での取り組みを定着させ、集団参加の力を育むことができた。今後はさらに多くの教員が集団における自立活動に取り組めるようにする必要がある。	個別の自立活動における「自分メーター」の活用や集団での自立活動を充実させること等によって、復学を円滑に進める。	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き「自分メーター」を活用し、復学に生かす。また、復学支援会議において「自分メーター」の成果を反映できるように会議資料の中に項目化し、有効に活用する。また、日本工業大学と連携し、さらに「自分メーター」アプリを活用しやすいものにする。 ・集団における自立活動は、引き続き、各学部週1回、全ての教員が参加・協力しながら授業を実施する。情報交換を密にし、児童生徒の実態や課題が、授業に反映されるようにする。(相談・研究部) ・「自分メーター」で児童の実態や課題を的確に把握するためにPDCAシートを活用し、自立活動の課題を明確化して指導する。PDCAシートをもとに、定期的にケース会を行い、集団における自立活動にも反映させ、授業内容を充実させるとともに、復学支援に生かす。(小学部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分メーター」の取組を復学支援会議において有効に活用できた。また、アプリについてさらに活用しやすいものになった。 ・集団における自立活動で、全教員の参加のもと、児童生徒の実態や課題にせまる授業ができた。 ・「自分メーター」について、PDCAシートを活用し、定期的にケース会をしながら、自立活動の課題を明確化して指導できた。また、復学支援会議でも有効に活用することができた。(小学部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分メーター」について、復学支援会議資料の中に項目化することで、本人の自己理解や成長をわかりやすく提示することができ、復学に生かすことができた。日本工業大学とのアプリ化の取組は、コロナ禍のなか、スタートが遅れてしまったが、十分な情報交換をしながら、進めることができています。 ・集団における自立活動は、小、中ともに、全教員が参加しながら、情報共有し、実態に合わせて、計画的に行うことができた。(相談・研究部) ・定期面談を行うだけでなく、毎日の授業の様子についても学部内で情報共有することによって、個々の課題について学部全体で検討することができた。また、復学支援会に向けても情報共有を行うことができた。(小学部) 	A
3	平成31年度は、集会行事での発表や作品の展示を取り上げ児童生徒も、行事を作り上げていく達成感、充実感を感じられるよう、看板作り等の役割を設けて取り組んだ。また、職業に関する講話などによって、児童生徒自身が将来の夢や進路について考える機会を設けることができた。令和2年度はすべての児童生徒が基本的自尊感情を高めることができるような共有体験の場をさらに増やしていきたい。	児童生徒同士、児童生徒と教員との共有体験が深まる場を多く設定し、児童生徒の基本的自尊感情を高めていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・小集団で行う教科の学習は元より、集団での自立活動や体育などの大きな集団での授業の中で、生徒一人一人が安心して活動に参加できる環境や雰囲気を作る。また、教師や友達との関わりの中で学習を深め、自尊感情を高められるような活動を用意する。(中学部) ・職業に関する調べ学習活動を通して、自己理解を深めるとともに、自分に合った進路や将来について考える機会をもてるようにする。実施にあたっては、ワークシートやICT機器を有効活用したり、グループングによる共同学習や発表の場面を設定したりする。(指導・保健部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人が主体的に取り組める活動や共同で取り組める活動を用意することで、生徒が自尊感情を高めることができた。(中学部) ・主体的に調べ学習やグループ活動に取り組むことで、共有体験や自己理解を深めつつ、自己の進路や将来について考えることができた。(指導・保健部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会では、各生徒が自分ができること(発表、制作、その他役割)を意欲的に考え、取り組むことができた。振り返りの活動で、生徒同士の相互評価を入れてフィードバックすることで、生徒がより自尊感情を高めることができた。 ・委員会活動では、勤労奉仕の観点から委員会ごとに自主的に活動内容を考え、取り組むことができた。(中学部) ・生徒自らPCやタブレットを操作し、各々が興味をもった職業に関する調べ学習2時間を行った。仕事の内容ややりがい等を調べる活動を通して、自分の得意なことや苦手なこと、今後の目標を考えることができた。また、小グループ内での発表や意見交換を通して、自己理解を深めつつ、互いに認め合うことができた。(指導・保健部) 	A
4	昨年度は全市町村へのパンフレットの配布を通して伊奈分校のセンター的機能を周知することができた。公開講座も夏冬2回実施し、県内から約260名の教員の参加があった。転出児童の追調査については新書式を作成することができた。今後は調査結果を集約し、小中高等学校等とニーズを適切に把握した上で地域との連携を充実させる必要がある。	学齢期の精神疾患や心身症等の理解のための情報や支援方法を発信し、小中高等学校等のニーズに応えていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・全市町村の教育委員会へのパンフレットの配布等をおし、伊奈分校の取組を広く発信し、「精神疾患・心身症」の病弱特別支援学校として、特性を生かしたセンター的機能を果たせるようにする。また、県内の教員の関心の高い内容の公開講座を年2回実施し、病弱教育への理解を深める。 ・転出児童生徒の追調査を集約し、小中学校等のニーズを適切に把握した上で、地域との連携を充実させる。(相談・研究部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・全市町村教育委員会にパンフレットを配布し、周知できた。また、公開講座を年2回実施できた。 ・転出児童生徒の追調査を集約し、活用することができた。(相談・研究部) 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍のため、パンフレットでの周知や、公開講座の開催はできなかったが、メールや地域支援の機会を利用して、できる限りの周知を行った。地域支援の要請も昨年より増加している。 ・昨年度の転出児童生徒の追調査を集約し、今年度の復学支援に活用することができた。本年度も、追調査を集約中である。(相談研究部) 	A

学校関係者評価		
実施日 令和3年2月10日		
学校関係者からの意見・要望・評価等		
<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器の使用により学習の幅が広がり、子ども達の興味関心が高められたと思う。この点において病弱教育における「主体的・対話的で深い学び」を追求したことは、普通学級においても応用できると思う。 ・保護者アンケートでは概ね満足されている実態が分かった。子どもたちの喜ばしい成長の様子と、学校に関する感謝の気持ちが感じられ、この意見が最も学校の教育を評価していると思う。基礎的な学力の面で、多少数値が低いように感じるので、致し方無い面もあるかと思う一方、これからさらに研究を深めていくことも必要。学習の遅れを心配されているようなので、復学にあたっては、各教科ごとに脱落部分を明確化する事で保護者も対応しやすいのではと思う。 ・「自分メーター」は、とても素晴らしいものだと思う。普及率での活用も考えられているのではないかと。また、アプリも日本工業大学と協力しながら、取り組みやすい形にしていきたい。(相談研究部) ・「自分メーター」を活用しながら、さらに使いやすい形に改良していく。また、アプリも日本工業大学と協力しながら、取り組みやすい形にしていきたい。(相談研究部) ・PDCAシートを有効活用することができなかったため、シートの活用の仕方について再度検討していきたい。(小学部) ・コロナ禍においても、行事を全て中止とはせず、規模を縮小したり、回数減らしたりして実施したことについては、大変な苦労があったのではないかとと思う。 ・調べたい職業を選択する前段階として、自己理解を深められるような話し合い活動を設定することで、更に共有体験を得ることができる。 ・道徳など、他教科の学習と関連付け、横断的な授業を計画する。 ・学びを深めるため、3～4時間程度時間を確保したい。(指導・保健部) ・前籍校との関係構築や病弱教育のセンター的機能を用いた学校コンサルテーションは、このものみならず、学校教員の不安解消や、二次障害を起さないための取り組みとして重要な活動だと思う。相談事例184件の対応は、普通学校の先生方のニーズと伊奈分校の取り組みが合致している証でもあり評価できる。 ・センター的機能は、今後ますます需要が見込まれるのではないかと。人的増員(保障)に関しても改善が望まれる。 		